



館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 7 月 1 2 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

リカバリーウェア



毎日暑いし、湿度は高いし、夜は寝苦しいし、やってられな〜〜〜いと思っているあなた! 世の中には良いのがあるらしいですよ。テレホンショッピングみたいな出だしですいません。「疲労回復」「睡眠の質向上」「身体のリラックス効果」

が期待されるリカバリーウェアは、血流を良くして、疲労物質を流しやすくすることで疲労を回復する効果があり、就寝時に着用すると、睡眠中に疲労を回復して、翌日まで疲労感を持ち越しにくいとのこと。また、血流が良くなると放熱しやすくなり、深部体温が低下することで深い眠りに入りやすくなる効果もあるそうです。つまり、身体の回復をサポートするために設計されたウェアということです。スポーツやトレーニングの後、長時間の座位や立ち作業の後などに着用するのもお勧めだとか。

着るだけで疲れがとれるなら夢のような商品。中には遠赤外線効果を謳ったものもありますが、スウェットのようにゆったりとしたタイプもあります。締め付け感がなく、体の緊張を解いてくれるため、着用するだけでリラックス効果も期待できるのだそうです。

しかし、本当に効くのか実際に買って着用しなければ分からないということが悩ましい。結構高いし、1万数千円から3万数千円しますよ。上下で。ん〜〜まだ踏み込めない。

卵パック

卵パックには、たまごをしっかり保護し、無事に消費者のもとへ届けるための工夫が込められています。たまごパックの歴史は意外と浅く、昭和 30 年代頃までは、カゴに入れたり新聞紙に包んだりして持ち運ぶのが一般的でした。しかし、スーパーなどの量販店の発展とともに、たまごを大量陳列したり、生産者から量販店へ届ける物流システムを整える必要が出てきたため、現在の形のたまごパックが誕生しました。

昭和 38 年、国内で初めてたまごパックを作ったのは大阪府池田市の「エフピコダイヤフーズ(当時「ダイヤフーズ)」です。ちなみにエフピコ山形工場は、山形県寒河江市にあります。ダイヤフーズでは、まず、当時進駐軍が使っていたお弁当箱型の形を参考にした紙製のたまごパックをスーパーに提案しましたが、当時、日本人は中身が見えないと買わないという問題に直面しました。そこで、透明で薄く、安価な塩化ビニールという素材の存在を知ったダイヤフーズは、当時日本にはまだなかった、塩化ビニールシートを成形するための連続真空成形機を開発し、たまごの形に沿った丸い形状の「たまごパック第一号」の誕生にこぎ着けます。しかし今度は、中身は見えてもたまごが割れてしまうという問題が発生。

そこで、数々の試行錯誤の末に開発されたのが、現在のたまごパックの原型である「八角錐形」のパックです。たまごを入れる部分が八角錐になっていれば、たまごがパックの中で宙づりになり、底まで落ち込まず、衝撃は伝わりません。さらにパックを交互にずらすことで積み重ねられる形状にして、無事にスーパーに受け入れられ、たまごパックは急速に日本中へと広まりました。

現在も使われているたまごパックは、実は3重構造になっていて、たまごに触れない真ん中の層には、リサイクル原料が使われているのだそうです。また驚くべきことに、開発から 50 年余りが経った今でも、原型はほぼ当時のままなのだそうです。ただし、現在使用されている透明なプラスチックの素材は「A-PET」です。A-PET は透明性が高く、耐油性や耐薬品性にも優れています。

ある実験では、20kg の重りを卵パックに乗せてもつぶれませんでした。すごい!! ですから、スーパーで買い物したとき、卵パックが一番下に置くのが正解なのだそうです。私はなんとなく心配で、一番上にしてましたが、それはむしろ安定感を欠くのでマイナスなのだそうです。

